

# 尾道（小野道、苧の道）の登場する読本『金花夕英』

藤 沢 毅

江戸時代の文学ジャンルである読本は、中国の白話小説からの強い影響を受けて生まれた（「翻案」と言つて、筋立てを中国白話小説に借り、舞台や登場人物を日本に変えたものがあつた）が、後には独自の展開を見せ、歴史的事件を扱つたもの、敵討ちを扱つたもの、歌舞伎や浄瑠璃を元にしたものなど、さまざまな諸相を見せるエンターテイメントであつた。

このたび紹介する読本は、梅暮里谷峨作、蘭齋北嵩画、文化六年（一八〇九）刊の『唐金藻右衛門金花夕映』（以下、『金花夕映』と略記）である。

この作品では、巻二において「備後国小野道」が舞台となる。「備後国小野道」は、当然「備後国尾道」を指してのものと読むことができる。なお、このよ

うに、地名や人名をわざと一部変えて書くことはよくあつた（理由はさまざまだが、差し障りを未然に避けるためということが多い）。

まず、全体のあらすじを紹介しよう。

【巻一】赤松満祐の家臣である秋霧高寧に仕える唐金藻右衛門は、母に孝を尽くす。魚を恵んでくれた魚売りの女と婚姻し、茂之助が生まれる。女は童女であり、食玉を茂之助に残し、去る。將軍足利義教はこの玉を召し寄せ、返却しない。童女は藻右衛門の夢に未来を告げ、茂之助は行方不明となる。満祐が義教に諫言するが、義教は怒り満祐の額を打つ。高寧の長男である右門は満祐に仕えていたが、満祐の憤懣を感じ、出奔する。

【卷二】備後國小野道の豪家小野崎堂四郎は風雅を樂しむ。堂四郎の妻の足立は婢女の胡蝶を虐め、布を盗んだ罪を着せ責め殺す。堂四郎と足立の娘の水草は、停泊中の船の船長と密通。水草のもとへ忍んできた船長は盜賊として殺される。堂四郎に仕える八兵二は三百両を送り、船乗りを宥める。胡蝶の靈現れるも足立には手出しが出来ない。水草は船長との子を産むが、足立は虐待する。堂四郎病死。小野崎家は零落し、足立は強盜殺人を働く。

【卷三】高寧の次男の左門は、継母の讒言を受け、伯母の妙抄尼のもとに身を寄せるが、遊女の関の小まんと深い仲になる。高寧の病に、藻右衛門は左門を呼び返しに赴くが、揚代の二百両のため戻る途中に足立と争う。足立は盜賊（泥藏、実は八兵二）に殺され、藻右衛門は足立の持つていた二百両を持ち関に行く。

【卷四】野山の三吉は、与作より二百両を盗み小まんに渡す。与作は蘇生していた船長であり、小まんは水草、三吉は二人の子であった。小まんは左門と関係をもったことを恥じて自害。与作は海賊

和泉次郎であり、捕り手が迫る中、隱形の術を用い逃亡する。

【卷五】日親上人の布教に対し、義教は弾圧を加え幽閉する。義教は満祐の誘いで船遊び。暴風が吹き、海賊和泉次郎が襲い、義教を弑す。次郎は秋霧右門であった。藻右衛門は二代目の与作（三吉）を連れこの場に來たり、次郎は与作に首を手柄とせよと言い自害。満祐は与作を家臣となし、藻右衛門に東金の地を与える。義勝が將軍となる。日親上人が藻右衛門を訪ね、自分が茂之助であることを告げる。泥藏は日親に教化され、日悔と名乗る。

嘉吉の乱という歴史的事件を扱って、足利義教と赤松満祐を描くが、史実と違い、義教を殺すのは海賊の和泉次郎（実は満祐の元家臣である秋霧右門）であり、次郎は自ら我が子の与作に討たれることで、与作を満祐の家臣とする。義教は暗君として殺され、一方、満祐の滅亡は描かれない（これは、当時としては実はとんでもない設定）。

唐金藻右衛門は、実在した東金の豪商水野茂右衛門をモデルとしたもの。延享二年（一七四五）初演

の浄瑠璃「唐金茂右衛門東鬘」に基づいたこのことが「例言」より読み取れる。とはいえ、この浄瑠璃作品の内容とはあまり関係がない。浄瑠璃の「唐金茂右衛門」の名を借り、「藻右衛門」と変えてはいるが、実在の水野茂右衛門をイメージさせていると言った方がよいかもしれない。

巻一はいわゆる蛇女房譚。母親に孝を尽くす藻右衛門に対し、童女が嫁入りし子を産む。与える玉は子の食となる玉でもあり（蛇の目玉ではない）、また驪竜の玉とも呼ばれる。巻一では、この童女の子の茂之助と、また右門がそれぞれ失踪・出奔し、巻五にいたって、茂之助は日親、右門は和泉次郎であることがわかるという仕掛けがある。同様に、〇〇は実は△△であった、という設定が多い。

巻四には、「恋女房染分手綱」（浄瑠璃。時代物。一三段。吉田冠子、三好松洛合作。寛延四年（一七五二）、大坂・竹本座初演。同年に江戸・中村座で歌舞伎化）などで有名になった丹波与作、関の小万、三吉の名を使って親子の邂逅を描く。また、巻五には、將軍義教の弾圧にも負けずに布教活動をした日親上人の奇瑞が描かれる。『日親上人徳行記』（元禄一六年（一七〇三）刊本、宝永元年（一七〇四）

刊本などあり）を参照したもののか。

さて、問題の巻二である。巻二は次のように始まる。

こゝに備後国小野道といへる地所は、諸国より  
の船着にして、自然と富ぬれば、鄙にあるべき  
さまにもなき風俗おしうつり、風雅をたしむも  
の多かりき。

その小野道に住む小野崎堂四郎という豪家（「豪商」とは書かれていない）が紹介される。堂四郎は家の仕事を妻の足立に任せ、風雅の道にかかりきりになっているという設定である。そして、この足立が貪欲で邪見であり、婢女の胡蝶をいじめるという展開が描かれる。

胡蝶は綿布十反を染物屋に染めさせる仕事を命じられ、その通りにするが、約束の期日になっても品物ができてこない。足立は、堂四郎の言いつけしか聞かず、自分の命じたことは蔑ろにしているからであると、胡蝶に怒る。これは若く美しい胡蝶に嫉妬し、夫堂四郎との関係を疑っての言いがかりであつ

た。染物屋に恨み言を言う胡蝶に対し、染物屋の主人は染め上がった九反の布を渡す。一反の不足を言い立てると、最初から九反であったと言い張り、あげくには店の者総掛かりで胡蝶を打擲する。主家へ帰り、そのことを訴えると、堂四郎は染物屋を怒るものの、足立は一反を胡蝶が売ったとして拷問し、ついには責め殺してしまう（ひどい！）。胡蝶の死骸は「わが家よりはん道ばかり向方なる花川の深みへうち込み」、入水自殺したかのようになしておかれた（この「花川」が実際にあった尾道の河川を指しているのかはわからない。現在のイメージだと栗原川が怪しく思われるが、長江や防地口に注いだ川のことであるかもしれないし、あるいはまったく架空のイメージである可能性もある）。

いったん話が変わって、堂四郎と足立の娘である水草は一六歳の美少女。気鬱を生じ、医師の勧めで屋敷統きに別業を新築し、そこに移り住む。楼上からの景色はすばらしく（海がよく見えており、後に停泊している大船の船長と顔を見合わせる事があったので、堂四郎の屋敷は海沿いにあったことがわかる）、気鬱も晴れていく。

この小野道の津は殊に繁栄にして、大船の出入繁き中に…。

と、港が紹介され、そこに停泊していた逍遙丸という大船の船長と水草が思い合うようになり、結ばれる。水草の住む別業を訪れた船長は、八兵二に見つかり、盗賊として打ち殺される。

この事件が描かれた後、殺された胡蝶の幽霊が現れるということが書かれる。

婢女胡てふは足立が為に非命の死を遂、その上、花川へうち込れ、怨魂、水中にとどまり、夜な夜な此処に円火燃あがりては、「あら、苦しや。絶かたや」と泣叫ぶ。夜中、此辺りを往來なす者あれば、誰彼の差別なく、人々の皮肉の間に分入れば、寒熱して渾身痛絶難く、時として両眼血ばしり、逆立、あたりを白眼ていへるは、「情なの足立。恨めしの悪婦。罪なきわらはを打殺し、花川へ沈にかけ、その時のくるしみ、いかばかりか。人に知らせんまでに、罪も恨みもなき人をくるしむるの気の毒さよ」と言終れば、はや本心に立帰り、渾身の痛み拭



へるごとく愈。かくする事、三日ばかりのうちといへども、なかなか痛みくるしむの言語に述べたく、夫よりしては、見もし聞もしするもの、這花川を通らざれば、頃日、絶て往来するものなきとぞ。

花川に死体を投げ込まれた胡蝶の怨霊は、花川の近くに現れ、夜に往来するものに憑依して恨み言を言う。

また、この後、発端となった染物屋でも怪異が起こり、胡蝶の預けた残りの一反の綿布が見つかる。

染殿の許には、数多の藍甕の中、一ト壺、初更より四更の間、ふつふつ煮あがる音して、其甕のうへとおぼしきに妄火燃ては消、消ては燃けるの怪有、夜毎なれば、主、管家も何事の祟りにやと怖しく思ひ、巫女、戸視をたのみて占はしむるに、「壺中にこそ物ありて、祈禱るとも詮なかるべし」との教に、藍甕の中を探見るに、ゆくりなくも一反の綿布出たり。主門平、見るより、『扱は前に小野崎堂四郎が婢女、持来りし布なめり。されば、女子の貝（甲斐）な

き者をして、多く男子の打擲なし、無実で陥いれしや」と、直に胸にこたへ、目閉いたりしが、管家も同じおもひに口外はなさざれども、慚愧ける形勢にて、布を返したきを思へども、その事より責殺されぬるをさき、いとど便なく思ひつづくれれば、弱身の霊とやらんにやありけん、布を藍甕より出せし夜より、奇怪はやみぬれど、管家の中一位、熱の意地して、その夜より罵りいへるは、「御身達を恨むるは仮初の事にして、今、布出、わらはが悪名消ぬるうへは、恨みもうすし。唯、末期の苦痛に魂魄、原へ帰せず。中有に迷ひあれば、一トたび足立を冤んとおもひ、主家の門まで行つれど、足立の両眼、日月のごとくなるを一ト目見ると、渾身縮み、近よること能はず。空しく去り、時を待の無墓身なり」と、さめざめと打歎くと見えしが、酔の醒たるごとくして、心気晴々なしけるうちより、先非を悔ひ、袖に涙を拭はざる者もなく、跡懇に訪ひ弔らわん事をぞ思ひける。

花川近辺に現れた時と同じように、恨みの対象は

あくまでも自分を責め殺した足立である。しかし、胡蝶の霊は、足立を恐れ近づけない。怨霊が生者に叶わないのである。

さて、船長が殺されたことを知った水草は悲しむが、船長との子を宿しているために自害せず月を重ね、両親には内密のまま男児を産む。しかし、それを知った足立は怒り、不義の子として水草から奪いとる。腰元の小賤は水草の産んだ子を連れ、屋敷から立ち退く。悲嘆から病になった水草に、胡蝶の霊が憑依して叫ぶ。

「やよ、足立。汝が非道の行ひの案内へ自然と押うつり、罪なきものもち擲き、剩、身に覺ゆる事なきに非命にわれを殺せしより、黄泉の鬼となれり。這恨、いはんとすれど、汝が強悪に近寄事をおそれ、頃日、愛女の病にたゆめる虚に乘じ、水草が胸間にわけ入り、怨恨を晴さんとおもふなり。汝、見よや。此うへ、うき目を見せん」

とて、毎夜毎夜丑満（丑三）頃より、水草は物の怪発りて、くさぐさの恨める中にも、「此家、三年たたざるに滅亡なさしめ、その上、此小野

道を黒土となし見せんずもの」と誓りければ、

：

相変わらず、足立に対して直接恨みを晴らすことはできない胡蝶。足立に対して手出しができないためか、小野崎家を三年の中に滅亡させると宣言、また、「小野道を黒土」にするとまで言う（さあ、大変。小野道が「黒土」、つまり火事で焼けた土、焦土となってしまう）。

堂四郎たちは慌て、加持祈禱などするが、さて、ここで解釈が難しい場面になる。まずは、堂四郎たちが慌て、対応した様子を次にあげる。

堂四郎はじめ百姓等、鄙のならひとて大に慌て、威怖き事に思ひ、加持祈禱をすすすめ、手を尽せば、その夜は物怪退くにや、鬱々と睡れど、また翌夜、同じ時刻になれば前の夜に替る事なく、斯する事しばらくなり。『愛女の心通ぜし船長を片落に打殺せし故、その恨、愛女の胸間に入りて仇なすものならん。いかながなすべく』と、堂四郎も当惑なし、『妻足立の暴悪積ればかかる報ひはあるべき筈』とも悔ひ思へども、

わが家宿世の業より小野道のもの一同に祟ら  
あるの気の毒なれば、近隣の里正はじめ、こま  
いの百姓等を集め商議なすに、「神にも祭らず  
んば此祟り止まじき」といへるもの多かりけれ  
ば、一同に「宜なり」と諾し、尸現に告て古例  
の式をもつて逍遙丸の船長の亡霊を小野道の地  
名その儘、小野道大明神と崇む。

怨霊の正体は間違ひなく胡蝶のものである。しか  
し、堂四郎は、『愛女の心通ぜし船長を片落に打殺  
せし故、その恨、愛女の胸間に入りて仇なすものな  
らん』と言っている。これはどういうことである  
うか。

これまで胡蝶の霊は、直接足立に対して恨み言を  
言うことがかなわなかった。今、水草に憑依して初  
めて足立に対して恨みを訴えているようではあつ  
た。しかし、堂四郎たちにとつてみれば、水草に憑  
依している霊の正体がわかつていないのではない  
か。では、「やよ、足立。汝が非道の行ひの家内へ  
自然と押うつり…」の台詞はどう考えるべきか。こ  
れは胡蝶の霊の思いであり、これを直接足立に対し  
て言うことはできなかつたのではないか。「…這恨、

いはんとすれど、汝が強悪に近寄事をおそれ」るの  
は相変わらずであり、「頃日、愛女の病にたゆめる  
虚に乗じ、水草が胸間にわけ入り、怨恨を晴さん  
とおもふなり。汝、見よや。此うへ、うき目を見せん」  
は、思っているだけ。そして、「此家、三年たたざ  
るに滅亡なさしめ、その上、此小野道を黒土となし  
見せんずもの」という罾りのみが届いていたのでは  
ないか。

結局、堂四郎は「逍遙丸の船長の亡霊」をもつて  
「小野道大明神」として祀り上げた。祀るべき対象  
は違つたのだが、胡蝶にとつて愛しい男の霊を祀つ  
たためか、水草に憑依した霊は去り、病も平癒する。  
しかし、「妖孽≪イロイロハザハイ≫(孽)は、原文では草  
冠に「髪ニ、跡を追ひて攻れば、堂四郎も愁ひつもあり、  
竟に病ひニ死す」とあり、まず、堂四郎が死んだこ  
とがわかる。一方、足立は夫の死にも悲しむことな  
く、非道ぶりは増長するばかり。これに使われる者  
たちは愛想を尽かし、みな辞めてしまふ。その結果、  
「次第に家貧しく、堂四郎死て三年になるかならざ  
るに、阿女水草も何地へか売なし、身の代の黄金を  
もてその日その日を過ぬ」ということになる。怨霊  
の呪いの言葉「此家、三年たたざるに滅亡なさしめ」

が実現したことになる。足立はなおも悪行を止めず、盗みをなして生活をする。

染物屋の主人門平は、「胡蝶が冤魂を見しより、心に罪なきものを間違の無実に入れ、打擲き、その事より攻殺さるるに至れば、『わが罪も免れかたし』と心に思ひ」、藍甕より出てきた綿布を霊体として、朝晩供物を供えて吊っていた。堂四郎が小野道大明神を祀りあげると、それを『正しく胡蝶が霊ならん』と思い、綿布十反を幟に染めあげ、奉納する。これによって「小野道明神、神位ましけるや、いよいよ繁栄なし、何事の祈願にても叶はざるはなきとかや」ということになる（この展開はよくわからな

てふに染布の事より無実をいひかけし者にや」と記される。

ここまでを振り返ってみよう。胡蝶は、足立からのいわれのない嫉妬によって虐められていた。染物屋において預けた綿布が一反足りなくなったことについて無実の罪を受け、それをもとにさらに足立から責めを受け、殺されてしまう。しかし胡蝶の霊は、足立には手出しどころか直接恨み言を言うこともできない。小野道の民に憑き、染物屋の手代に憑き、また水草に憑いて恨みを述べるものの、足立への恨み言は届かない。この霊の祟りか、堂四郎は死に、小野崎家は滅び、また染物屋で胡蝶に無実の罪を着せた（かと思われる）手代は殺された。それにもかかわらず、足立は無事なのである。

この足立は巻三の終わりまで八兵二に殺されることになる（場所は伊勢の国、田村川のほとり）が、その場面で「胡蝶が冤魂ありありと、からからとうち笑ふ」と記され、また挿絵の詞書きでも「胡蝶が冤魂、報ひ来て、足立、非命に死す」とある。これにて、胡蝶の恨みは晴れたのであろうか、物語に再び現れることはなくなる。しかし、ここでも、胡蝶の霊が足立の力を奪ったり、あるいは殺害者の方に力

を貸したということはない。ただ、足立の死の場面に立ち合い、その死を喜んだのみであるとも読める。怨霊でも、強い悪人になわれない。それだけ、この足立という女性が強いつい印象が残るのである。足立は化物ではない。嫉妬深く、使用人を虐める悪い人間ではあつた。胡蝶を責め殺しても意に介さない。娘が不義をして秘かに子を産むと、怒りのあまりその子を殺しかけました。また、小野崎家が滅んだ後には、我欲を満たすため、娘を遊女に売り払い、さらに強盗殺人さえしている。

こうした鬼婆的存在は、実は読本史の中ですでに描かれてきた。山東京伝作の『優曇華物語』（文化元年刊）の「野猪婆」、手塚兎月作の『こし路の章』（文化三年刊）の「火閻婆」、栗杖亭鬼卯作の『新編陽炎之巻』（文化五年刊）の「番椒（蕃椒）婆」などがある。足立は仇名があるわけでもなく、普通の人間が恐ろしい鬼婆的存在になつていく印象が強い。

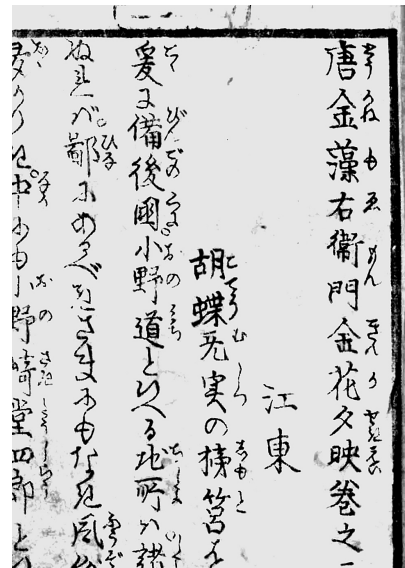
ここで、なぜ「足立」という名であるのかを考え、てみると、「あだち」の音から安達ヶ原の鬼婆伝説を想起させる効果があることに気づく。この伝説は、現代で言えば福島県二本松市の安達ヶ原に住んだという、人を殺す鬼婆の話である。謡曲「黒塚」で有

名であり、読本や草双紙、歌舞伎などにも採り入れられていた。

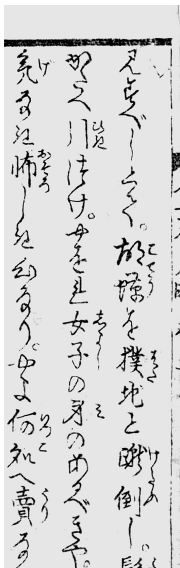
ところで、胡蝶について、結局は主人の妻に、若さや美しさへの嫉妬から、また使いに行つた染物屋の勘違いから、責め殺された女性ということになる。ちよつと気になるのが、亀山士綱の『尾道志稿』にも紹介された、『太平百物語』（享保一七年（一七三二）刊）巻四に所収される「女の執心、永く恨みを報ひし事」である。ここで詳しく紹介するのは避けるが、「備後の国尾道」で、「罪なきに罪におと」され、「食物をたちて、なぶり殺し」にされた竹という召使いの女性が、三代にわたり崇りをなし、その家を断絶させてしまった話を描いている。尾道は、こうした無実の罪で死んだ召使いの女性の怨霊による祟りというイメージがあつたのだろうか。もしかするとだが、『太平百物語』に描かれた話のイメージが、『金花夕英』にまで繋がってしまったのかもしれない（あるいは、十枚あるはずの布が「一枚足りな―い」という点は、皿屋敷伝説の、「お皿が」二枚足りな―い）に通ずるかもしれない）。実は、「胡蝶」の名の部分は入木による修正跡が残っている。入木とは、版木の一部を削り、代わり

の文字を彫った小片の木をそこに当てはめて印刷することである。図1・2をご覧いただきたいが、「胡蝶」の文字が明らかに他の文字と違うのがわかるであろう。ただし、管見の限り、ここに「胡蝶」ではない、他の文字が入っている本は見つかっていない。刊行以前の修正ではないだろうか。とすると、「胡蝶」の前に、最初に版木に彫り込まれていた文字は想像するしかない。このように刊行直前になって、特に登場人物の名前が入木によって修正される場合には、急遽差し障りが生じた場合がある。特に将軍家に産まれた子の名前と同じものであった時などが見受けられる。

最近私が扱った読本の例では、入木による修正ではないが、文政四年（一八二二）刊の『道成寺鐘魔記』がある。これは安珍・清姫きよひめの道成寺説話を用いた読本であるが、文政元年（一八一八）七月に将軍家（徳川家齊）に誕生した女兒が「喜代」と名づけられたため、あえて清姫に「すむひめ」と振り仮名をつけた。喜代姫誕生から少し時間はたっているが、「清姫」の名は換えるわけにはいかない。そこで漢字はそのままに振り仮名を「すむひめ」として対応したのである。同様の例では、鈴木重三『改訂増補』



(図1 巻2、1丁表)



(図2 巻2、4丁裏)

繪本と浮世絵』(二〇一七年、ぺりかん社)所収の「校合本は語る―「おきく」と「おさく」―」に、以下のような指摘がある。文化九年(一一八二)刊の合巻『十人揃皿訳続』で、校合本では「於菊」「きく」となっていた名前が、実際に刊行された版本では入木や版木の一面削除によって「於作」「さく」と修正されていた。享和元年(一一八〇)に誕生した菊千代(やはり家斉の子)を憚ってのことであろう。なお、この時は歌舞伎役者の名も享和元年から菊千代君元服改名(↓斉順)のある文化一二年(一一八五)まで、瀬川菊之助↓瀬川路之助(↓路考)、瀬川菊三郎↓瀬川路三郎と改めている。

『金花夕英』の場合は、「清姫」や「菊」のような典拠のある名前でなかったのだろうが、偶然、差し障りが生じた可能性がある。そこで、刊行直前の年、文化五年(一一八〇)に産まれた將軍家の姫がいなか調べてみると、五月に元姫と名づけられた子が誕生していた(『新訂増補』国史大系 第四十八巻 続徳川実記 第一篇)(『黒板勝美編。一九三三年、国史大系刊行会・吉川弘文館・日用書房』による)。「胡蝶」に相当するのは二文字分のスペースであるから、入木前の名前の文字は「もと」あるいは「元」の漢

字を使用した二文字の名前だったのではないか。

小野道を舞台とした話は巻二で終了している。すなわち、染物屋の手代が足立に殺されるところが最後である。しかし、建立された小野崎大明神について、巻二の末で次のような注記が入る。

此小野道大明神は、今は備後の芋の道にありしとぞ。一説に丑寅明神、是なりともいふ。又、這芋の道の湊は往昔、玉の浦といひしを、菅丞相、筑紫へ左遷の御時、此地、和泉屋儀右衛門が家に御輿を下させ玉ふにつき、通御の路筋へ芋売(芋壘)を敷詰たれば ○ 丞相、歡喜の余り、「以後、此所を芋の道と名付べし」と宣ひしより、玉の浦を芋の道と改む。また、自ノ御像を画給ひ、御衣の御袖、御冠紐とも下し玉はる。今以て儀右衛門が家にあるとぞ。御真筆の尊像は同国大山寺に納ありて、毎年六月廿五日祭礼ありけるとなり。

小野道大明神を(「一説に」としているが)丑寅明神(艮神社)のことにしてしまっている。御袖天

満宮との混同があつたか。

菅丞相こと菅原道真が左遷の際に尾道に立ち寄り、土地の民よりもてなしを受けたために、片袖と自画像を感謝として与え、それが御袖天満宮のご神体となつたという伝説については、よく知られているところであろう。『尾道志稿』（文化一三二（一八一六）年成立。亀山士綱著。『備後叢書』第五卷（得能正通編。一九九〇年、東洋書店）による）の「大山寺」の項には、以下のようにある。

…天満宮は延喜元年、菅公筑紫へ赴き給ふ時、当浦へ御着船ましまし、一人の農夫「今の金屋先祖某也、古は農民なりし由」へ手から賜はりし御自筆の御影也。凡百七十年の余其家に秘蔵して代々尊敬せしが、延久の頃当山に一祠を建立し鎮座せしとなり。

今、長江の側に小麦畑と云所あり。菅公の御船、此地に着しと云。…（以下略）

金屋何某が家の記録に

菅原贈大相国、昌泰四年辛酉の春、太宰権帥に御左遷の勅任ありて筑紫に赴き給ふ時、御船を当浦によせ給ひ、江山の煙景を御眺望の為にや、

浦辺を徘徊し給ひぬるに、此浦の住人金屋主何某、時に畑に出て農業をせしが、丞相の尊顔を拝し奉り、島山の名など御物語申上、夫より我家に供奉し歸りて、有合の小麦の飯と甘醴を奉り饗応ければ、丞相深く農夫の志を感じ給ひ、御直筆の御姿を御衣の袖に模して賜りぬ。…（中略）…中古にいたり俗家の汚穢を恐れ憚りて、新に一祠を造営し遷座し奉りぬ。幾もあらで本地堂、僧舎など創草し、天神坊、大山寺と号し、朝夕供養守護のために密家の僧侶代々住持して別当の一精舎と成りぬ。古へより毎歳六月廿五日を御祭日に定め、初て拝顔し奉りし畑を其ま所持伝へて、絶ず小麦を作り御供の飯とし、又甘酒を醸し、此兩種を御影前に備へ奉ること、家の例と成し来りぬ。…（以下略）

だが、『金花夕英』では、道に芋を敷き詰めたということが記され、さらにそれが元で「芋の道」という地名が生まれたとまで言っている。これはちよつと問題だ（「和泉屋儀右衛門」と「御冠紐」もどこから来たのかわからないが、ここでは置いておく）。



『菅原道真事典』（神社と神道研究会編。二〇〇四年、勉誠出版）には、道真のために船の綱を解いて丸く巻き、円座の代わりとして道真を休ませたという伝説のある神社が多く紹介されている。中でも「綱敷天満神社（愛媛県今治市）」の項を執筆している市川彩氏によれば、「綱敷天神の名の天神社は、京都から九州博多まで十三社以上、瀬戸内航路を中心に分布している。社伝からして博多にあるのが一番古いものだといわれ、他は全て、これにならったものだという」とある。道筋に「芋」を敷き詰めたというのは、この変化形であろうか。

尾道の語源を「芋の道」とするのは、昭和に刊行された『沿線誌集成 第一輯』（宇垣武治編。一九二七年、土谷大正堂書籍部）に載る。ただし、こちらは菅原道真ではなく、神功皇后のことになっている。

又一説には、尾道は神功皇后、芋にて道を造り給ひしより、芋の道の転訛とも称せり。

（「尾道」の項）

この説の出所は書かれていないためわからない。

神功皇后の伝承では、尾道では鳥須井八幡神社、因島の重井八幡神社、また三原の糸碕神社に伝承がある（いずれも三韓征伐の際に立ち寄り、井戸の水を飲み賞美した、鳥が良い水の出る位置を示した、井戸の水を献上した、と井戸に関する伝承）。また、呉市豊町（大崎下島）の御手洗みたらいでは、その地名の由来として、神功皇后が手を洗ったとも、菅原道真が手を洗ったとも言われる。こうした伝承についてもまだまだ調査が必要だが、このへんに混同があったのではないか。現段階では、神功皇后の「芋の道」は、道真のものからの変化ではないかと推測しておく。

ちなみに、同書「御袖天満宮」の項では、

伝へ云ふ、延喜元年六月廿四日、菅公筑紫左遷の時、御舟を此浦に留めて海浜を徜徉し給ふ。時に金谷某、農業して畑にあり。直ちに公を己が家に迎へて、小麦飯、醴酒を供す。公、悦び給ひ、自ら狩衣の袖を截つて之を賜ふと、後、祠を建てて祀り、別当寺として大山寺を建つ。今、長江町の東方、福善寺の崖に小麦畑と云ふ所あり。金谷氏の畑にして菅公の舟を繋ぎ給ひし処なりと。

とあり、『尾道志稿』に近い。

『金花夕英』巻二末の小野崎大明神についての注記は、菅原道真伝承、あるいは神功皇后伝承まで拡がっていった。結局、『金花夕英』の小野崎大明神についての注記がどこから来たものなのかは不明のままである。地誌や旅行記などに載っているものが見つかるとはしない。今後の調査に期待である。

### 【注】

『金花夕英』から引用するテキストとして架蔵本を使用した。

半紙本五巻五冊。文化六年刊（早印）。江戸・山崎平八、須原屋善五郎、西村宗七。文化六年生駒高峰序、文化五年六月自跋。

なお、本稿では本文の引用にあたって以下の措置を加えた。

- ・平仮名は現行の対応する平仮名に統一し、また、漢字も基本的には現行の字体に統一した。
- ・振仮名は底本にあるものの中、現在、我々が読むのに必要あるいは便利と思われるもののみを付した。なお、左訓は ≧ ≡ に入れて示した。

・踊り字は「々」を除き、全て開いた。

・私に句読点や濁点、「」『』を補い、また段落を設定した。

・私に文字を補った場合は「」に入れて、それを表した。

・割書は「」に入れて、それを示した

・明らかな誤刻も基本的にはそのままにした。ただし、そのために意味が不明確になってしまった場合には、該当の文字あるいは語句の右または下に、正しいと思われる文字あるいは語句を（ ）に入れて示した。

また、『備後叢書』や『沿線誌集成 第一輯』からの引用に際しても、旧漢字を新漢字に改め、読点や濁点を補った。

―ふじさわ・たけし 尾道市立大学学長―



図3 卷2、2丁裏3丁表  
「胡蝶、布の不足をせめ、かへつてうたるる」



図4 卷2、5丁裏6丁表 「胡蝶、無実<sup>せめころ</sup>に責殺さるる」

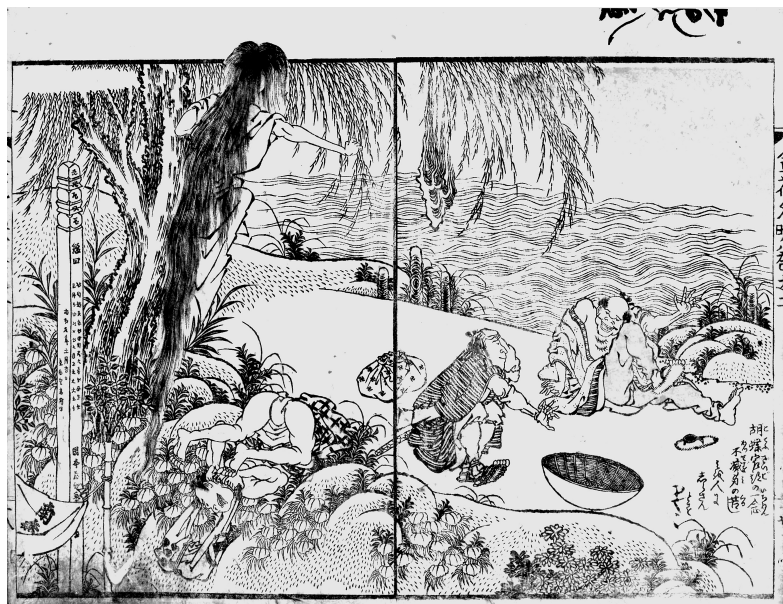


図5 卷2、17丁裏18丁表  
 「胡蝶<sup>めつせす</sup>最期の一念不滅、身の苦しみを人にしらさんとす」

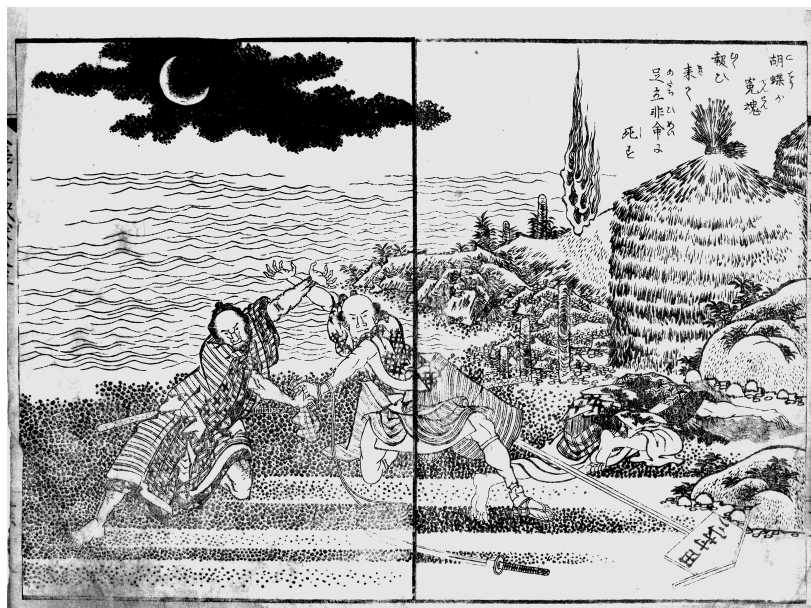


図6 卷3、15丁裏16丁表  
 「胡蝶<sup>べんこん</sup>が冤魂、報ひ来て、足立、非命に死す」